

～教員おすすりめ本～ No. 24

総合社会学部 社会・マスメディア系専攻
清島 秀樹



『ヴィクトリア朝時代のインターネット』

トム・スタンデーヂ 著
服部桂 訳

【先生からのコメント】

19 世紀に、「電信」が登場。それは、電線に電気を流したり切ったりすることにより、電線の末端にいる者同士が、信号（＝情報）を送りあう、新しいコミュニケーション手段であった。これにより、距離に関係なく、遠方であっても、（ロンドンとパリ間でも、）同時に語り合うことが可能になった。

それは、世界を変える。遠方で起こっている戦争の状況、株価の変動、災害などを、何処からでも、ほぼ同時に知ることが出来るようになり、「世界規模のニュース」というものが可能になり、世界的巨大メディアも出現する。

この電信をめぐる 19 世紀社会の騒動を論じた書籍であり、現代のネットの急速な発展を考える上で、示唆に富む。「ネット業界のカルト的古典」とも呼ばれる作品。



『われはロボット：決定版』

アイザック・アシモフ 著
小尾英佐 訳

【先生からのコメント】

ものを考えるロボットを題材にした、古典的作品。後の多くのロボットもの SF に登場する「ロボット 3 原則」を初めて提示した短編集で、後の時代への影響力は極めて大きい。原題は、I, ROBOT だが、日本語では、上記のハヤカワ版以外にも、幾つかの翻訳が出ている。

作品内では、「考える能力とは何か？」「ロボットは人間の召使にとどまるのか？ 反抗するのか？」「自律的とは？」「人と機械の関係は？」「心とは？」「人間の本質とは？」などをめぐる、哲学的な匂いがする問題が扱われる。普通の哲学書を読むより、遥かに、考えさせられる。

昨今、「人工知能」「人の能力を凌ぐ機械」などが云々されることが多いが、殆どの論は不毛にも見える。それらに興味がある人は、まず初めに、この作品を読んでほしい。

2018 年 10 月 12 日
近畿大学中央図書館